

幕末時代における技術と公論

—横井小楠を中心に—

ダヴィッド・ラブス*

はじめに

どんな文明でも、自己同一性のため、また周りの世界を理解、支配するために、自分を中心とする様々な世界像や認知モデルを作るものである。ほとんどの場合、なにか倫理的、道徳的な理想、あるいは基準を立てて、それに従おうとする。儒教の文明も例外ではなかったはずである。

例えば近世社会では、そのような理想像として「公共の道」が挙げられる。また、それは原則となり、肯定・否定両面における価値や状態、社会秩序を定義する。徳川社会の場合は、「我・他者」、「うち・そと」、「華・夷」などが、その例である。そして、他者あるいは野蛮な文化に対して、何を共通点や相違点にするかによって、「他者」の文化との遠近を判断し、それなりの政策を取る。ちなみに、その共通点や相違点の構成をどれだけ柔軟に変えることができるかによって、その文明の存続、適応力が決まるのである。

さて、本稿で取り上げたい問題は、天保社会のかなり排他的なエリートが、たった20年間で、まだ敵視されていた西洋社会との共通点をどのように戦略的に組み替えることができたのか、ということである。そして、その転換の過程を技術のとらえ方を通してみていきたい、ということ、聞き飽きてきた西洋技術の受容過程の話になると思われるかもしれぬ。だが、そうではなく、朱子学的な世界観の一環としてどのように技術をとらえてい

たかに集中したいと思う。もちろん、西洋の軍事技術の選別的な受容が行われたことは否めないのであるが、朱子学の中の技術の評価の空間がどれだけ広がったか、という角度から問題を考えてみたいと思っているのだ。つまり、近代化の過程を幕末時代に遡及的に投影したいわけではなく、当時の思想家の一人を中心に、朱子学の解釈の柔軟性を辿っていきたいのである。

いったい技術とは、何を指すものか。まずは広い意味で捉えることができる。つまり、どのような文明、宗教、文化などでも、その存続の最終目的は、繁栄や幸福であろう。そして、その目的のために原料や資材などを加工する。そこに利用する人間の知的能力、経験がそこに加わると、その組み合わせから、技術、技法が生まれてくるのだ。鋏でも、コンピュータのチップでも、今や技術になっており、社会へ様々な影響を与えている。例えば、政治の面では、統合または分割の傾向を支えたり、思想の面では、思考方法の変化や修正、認知モデルの前提の矯正に貢献したりしている。そのような働きにより、また遡及的にインプット情報の種類と範囲を拡大させるなど可能になってくるのである。

後期水戸学の貢献

まず、便宜上、この考察の出発点として、後期水戸学を挙げると、以下の通りまとめることができる。会沢安や藤田父子は、政治議論の伝統を興し、幕府や上級武士などの為政者が果たすべき統

*カレル大学助教

治の役目をどう果たしているか、を問うなど内外危機をテーマとして取り上げた。そして、重要な結論の一つとして、外部の問題—外患—が迫る程度は、内部の君臣関係の質（純粋性）に相当するものだ、という見解に達したと言える。

要するに、個人の行動の良し悪しが、個人の運命をも左右するという道徳的な前提が、そのまま国家の交流、すなわち、政治的なレベルに当て嵌められたわけである。

おおよそ後期水戸学の影響は、主に政治の面に一番大きかったと認めることができる。一方、すでに発足当初の時点から、技術の側面もおおよそと議論の範囲内に包含されていたとも言えるのではないだろうか。

当時、会沢安は攘夷論を提唱していたが、その一環として、西洋列国と実際の闘争の可能性を少なくとも否定はしなかった。思想史の観点から見れば、「文化的に野蛮なものを追い払う」という18世紀末の前段階のアプローチは、「野蛮人を軍事力を以て追い払う」という政策的な立場に切り替わったと主張できよう。

そのようにして、技術を重視する見方を考慮の範囲に自然に取り入れる土台ができあがった。これに関しては一応、二点指摘することができる。第一に、会沢は、彼の著書である『新論』（1825年執筆）において、日本の海防、海軍力、戦い方などを展開すると、相手（西洋）の長所は日本の短所に相当するという思考パターンをみごとに指摘しており、一方、藤田東湖も『弘道館記』において、ややあいまいにはあるが、西洋の武器を取り入れるべきだということに触れている。

当初、技術、特に軍事の技術が、テーマとして、どのように把握されていたかといえば、「テコの原理」が作用されているように思われる。すなわち、先に述べたように、相手の長所こそ自分の弱点だ、ということである。

そのようなわけで、この最初の段階で西洋の軍事の技術は、どうも異質的な要素として、防衛の

議論の枠に含まれていて、原則になっている。これは武器の国力とのかかわり方が徐々に意識され始めたからであろう。

第二に、民、特に農民の見方である。例えば、会沢の『新論』を分析しているB.T.Wakabayashi氏が指摘しているように¹、実際、会沢や藤田幽谷が西洋の軍事力より恐れていたのは、日本の「愚民」がキリスト教のプロパガンダによって誘惑されるばかりか、むしろ敵側になびき、遂には自分の藩をも攻撃するかもしれないということであつたのではないか。

この恐れの本拠の有無はひとまず問わずにおくが、要するに、後期水戸学の著者の当時の社会観には、「民は儒教の教化を十分に受けていないので、基本的に西洋文化と似たような「夷」の性格を有している」という先入観があつたように思われる。しかし、それと同時に、国家（日本）の防衛となると、当然、民は参画意識を持つだろうという、少し首尾一貫しない見方あるいはバイアスが見受けられるのである。

それについては、例えばDavid Howell氏に、近世社会のterritoriality（領土意識）や集団同一性についての優秀な研究があり²、近世社会には、身分あるいは「華」・「夷」の教化を通して、どのような境界線がどのように引かれていたかを分析している。例えば、地理的に見れば、水平方向に構想され、また社会的に見れば、垂直方向に構想された、二通りの見方が適用されていたという。

ペリー来航の思想的なきっかけ

このような国際観の基礎は、ほぼペリー来航のころまで続いてきたと思われる。が、ここでは、政治的な出来事としてのペリー来航に対する組織的な反応と、その来航が与えた理念的、思想的なきっかけに対する朱子学界での反応と区別が必要であろう。

政治的な面では、大船建造禁止が解禁となった

り、長崎海軍伝習所や講武所が設立されたりしたことなど、かなり明瞭な段階や政策が相次いでおり、一々挙げる必要はあるまい。

しかし、思想面から見れば、来航自体がすぐに何かを発生させるような、はっきりとした分かれ目ではなかったようである。まず、最初の段階として、朱子学者や他の思想家に対し、攘夷論か開国論か、どちら側に立つか、思想的な立場の選択を迫ってきた。その後、日本国内における外国人のプレゼンスの高まりが余儀なくされていくことを何らかの形で受け止める学者の数が徐々に増えていったと言える。

この段階は、安政時代とほぼ重なっており、過渡期と呼べるであろう。開国論者の思想を辿ってみると、この時期の共通点は、日本がやむを得ず開国政策を取るとしたら、どのように国際関係に主体として参加すればいいのか、という問いに集約していく様子が見られるのである。次の二つの例を見てみたい。

例えば、橋本左内は、安政4年11月（1857）に村田氏寿宛の手紙でこう推測している。即ち、「只今の国際情勢をみると、将来五大州は一国となって同盟国となり、盟主を立て、戦いをやめることになるだろう。その盟主はイギリスかロシアのいずれかだが、イギリスは「剽悍貪欲」、露は「沈鷲嚴勢」で、いずれのちには、露に衆望が帰するだろう。一方、只今の日本の国力ではとても独立が難しい。「中略」

この際、私は、ぜひとも露の同盟国になりたいと思う。その理由は、露には「信」があり、かつ日本とは「唇齒の国」である。わが国が露に従えば、露は我を徳とするだろうが、これに英は激怒し、我が国を伐つであろう。しかし、これこそが却って我が国の願うところで、露の支援があれば、たとえ敗れても、「皆滅」に至るようなことはない。そうならば、この一戦で我が弱が強に転じ「危を安に」変ずることになり、我が国は必ずや「真の強国」になるであろう。」³

左内にも、個人の行動の原理と、国家の行動の原理との間の区別がまだあまり付いておらず、一方、イギリス、ロシアなどの列国の政治目的に対しては、あまりに単純かつ大胆なモチーフが予測あるいは憶測されていたようである。

この書簡は、どのような歴史的な文脈で書かれたかといえば、左内は、実は蝦夷地の侵略を憂慮し、その防衛を構想していたときだったのであるが、日本の存立をロシアとの同盟によって保障しようとしていたと思われる。

しかし、周知の通り、一また歴史の皮肉なことであるが—そのわずか4年後、1861年に対馬ではかの「ボサドニック事件」が起こり、対馬がそのロシア軍艦によって数か月もの間占領され、結局、ボサドニック号がイギリスに追い出されてしまったのである。幕府は、何の動きも取れず、ただ傍観していただけで、結局、露の支配をまぬがれ、イギリスに大いに助けられることになったという事件である。

また、本稿の中心人物、横井小楠は、開国論に転換する直前、1853年頃に、以下のような意見を述べている。

「我が国の外夷に対する方針は、有道の国とは交際し、無道の国とは交際しないということである。有道無道の区別をせず、外国との交際をまったくしないのは天地公共の理に反しており、世界中の信頼を失うだろう。

もっとも、有道の国といっても、その意味は、我が国に対して信義を守るだけでは不十分である。他の国々に対しても同様に信義を守り、暴行侵略というような悪行をしない国のことである。このような有道の国が我が国に対して国交貿易を求めてきた場合には、これを断るべきではあるまい。」⁴

この中の「有道」と「無道」とは、即ち、200年あまりに渡って実際に行われた朝鮮やオランダとの交際の中で、小楠は、それを国際状態の模範としている。彼もまた、19世紀半ばの国際関係の本質を十分に理解しておらず、また、その自覚

がなかったにしても、その書簡の行間からは強い自信と主体性が透けて見えるであろう。

当時、日本を脅かそうとして、浦賀湾に乗り入れたアメリカ大船の「非道なふるまい」を責めるべきだとしながら、一方で、アメリカからの謝意を期待し、

「そのような国との交際は固く断ると言い聞かせれば、アメリカ使節は額を地につけて、陳謝し、態度を改めるから国交貿易をゆるしてくれと嘆願してくるにちがいない。」⁵
と、大胆にその論理を展開している。

日本国内での技術の利用

ここで、特に主張したいのは、先駆的な朱子学者は、外国人と接触した経験がなくとも、従来の思考方法から、合理的かつ現実主義的な判断にかなり早い時期から移行できた、という点である。小楠は、当時、まだ技術のことに直接に触れていなかったものの、貿易の開始の可能性を認めるという形で受容の余地を作っている。

この時点に、積極的な受容の見方が多様化し、軍事面や社会面で、色々な意見が生じてくるわけである。ペリー来航前後のころ、開国論者になった小楠は、早くから西洋の社会の機能性を深く見抜いていた。例えば、安政三年（1856）には、朱子学の理想の観点から、西洋社会のほうが、「人心は上下に一致してどこからも異論が出ないわけである」という判断に到達している⁶。

また、彼の西洋諸国の政権に対する見方に更に追っていくと、1860年に執筆した『国是三論』に行き着く。アメリカの大統領制や公共平和、イギリスの政府による民意の尊重など、それらの国の政治情勢を褒め讃えた上、「古代中国の三代の理想政治に合致する」と小楠はあえて主張している⁷。

それだけでなく、西洋社会の「上下の一致」を支えるのがキリスト教である、とまで分かってくるのである。いうまでもなく、小楠はあくまでも

朱子学者という立場を堅持し、念頭に絶えず置いていたのは、福井藩（また日本全国）の繁栄と統一のことであった。

彼が評価しているのは、西洋社会の政治的、社会的な機能性のことで、キリスト教そのものではない。言い換えれば、彼は理念を「技術化」し、一面的に手段としてとらえたと言える。

ちなみに、同じ書簡では、技術の悪用を警戒している。

「西洋諸国との交流が盛んになって日本にも各人が続々と入ってきているため、西洋の宗教と政治のことは自然と知れ渡ってしまうであろうが、そうなると、日本人の中の知能の優れた人物たちが、本当の聖人の道を知らないまま西洋の政治と宗教に感心してしまい、しらすらすのうちに邪教にとりつかれてしまう危険がある。」⁸

横井小楠が万延元年（1860）に執筆した『国是三論』には、福井藩の民の繁栄をひいては藩自体の繁栄の必然条件とし、また藩によって管理された生糸生産を元に、国際貿易を構想し、直接的か多様な生産技術の利用をも前提にしている。

誠に興味深い点は、『国是三論』に、一個の藩では、藩の当局、商人、民を含む、内政的、経済的な困難や不和を解決するには一つまり「公共の道」に戻るには一、国際貿易がほぼ不可欠な条件、あるいは理想の方法になってきた、とある点である。

小楠は、その文脈で、「栽培法」、「便利な機械」あるいは「民に技術を教える」など、技術の問題に直接に触れることもかなり多い。他方、民には、生産を組織する能力を全く認めようとせず、藩が、必ず主導力を発揮しなければならない、と断言している。

この一点を明治初期まで下ってみると、その後明治政府もかなり似たような経済方針を取っていたと指摘してもいいのではないだろうか。即ち、近代産業の育成のパターン、特にその官営模範工場の設立には、小楠が見出した政策や理念などと

の共通点が少なくないと見受けられるためである。

まさに小楠は『国是三論』という傑作品の三編を、それぞれ「富国」と「強兵」と「士道」、と適切に名付けたと言えるであろう。

終わりに

ところが、1860年代に入ると、国内の政治闘争が徐々に激化し、富国强兵の方針も、少なくとも藩のレベルで根付いていき、兵力と生産力の増大と、二元的に発展していくようになったと言える。残念ながら本稿において、これ以上日本国中での技術の利用を辿っていく余裕はないが、技術の利用の過程上から見れば、終止符を打つために、1863年の有名な騎兵隊の形成があったことを挙げておきたい。即ち、藩(長州藩)を防衛するため、農民の武装化が可能となったという点には⁹、少なくとも二つの意義が込められていたと思われる。

まず、一つには、武士の暴力行使の独占的な権利の終了が事実となったことである。それは社会構造にとっての決定的な事柄であり、先に言及した「民の役割」が大きく変化し、民による国の防衛や政治への積極的な参加の道が開かれるようになったということの意味する。また、社会秩序の視点から見れば、型式(身分)より、中身(意志)が優先されるようになり、社会変化の根本的な象徴になった。

二つ目は、決定機構への影響である。軍事的なパフォーマンス、あるいは、動員できる兵力が最大の目的となると、当然、武器の効率に対するプレッシャーが急増する。刀剣は、いくら武士階級と不可分で象徴的な武器だったと言っても、銃と比較すれば一目瞭然で、最大の違いは、戦闘の方法にあった。つまり、銃の場合、必ず部隊を組織する必要が生じる。そのため、高度な指揮系統の形成が必要となり、兵卒の個人的な特質は組織に埋没してしまう。また、武士個人としてのエートスの空間もなくなってしまうわけである。藩にお

いても国においても、その防衛を目的とし、武器の効率を図るとなれば、いわゆる非常時とされ、それぞれの社会層の伝統的な役割が大きく変わるのも当然であろう。身分制の抜本的な改革か、崩壊か、そのどちらかが余儀なくされてしまう。そのような意味で、「近代がドアを叩く」という象徴は、恐らく、これ以上明確な形を取ることはできなかったにちがいない。

最後に、1860年までの情勢をやや大雑把にみると、ある意味朱子学の「潜在的な空洞化」が見られるという点である。つまり、朱子学的な価値や理想的な秩序としての身分制の維持を目指しつつ、それへの「近道」としては技術が採用され、その役割や影響などが気づかれないかのように、徐々に増大化していたのである。

つまり、その近道の利用に成功した思想家の一人が、横井小楠であったと言えよう。彼は、「よそ」の方法、即ち、貿易が「うち」の目的、即ち、藩の繁栄や安定と両立できるという点を一時的にでも証明したのである。彼の行動や思想は、確かに佐久間象山の「東洋道德、西洋技術」というスローガンを思い出させる。しかしながら、技術利用の規模が急速に拡大していき、いかに社会構造の根本的変化を伴うかということをややく知ることになった時点には、すでに徳川社会の崩壊は不可逆的な段階までに進んでいたのである。

注

- 1 B. T. Wakabayashi, *Anti-Foreignism and Western Learning in Early Modern Japan. The New Thesis of 1825*. Harvard East Asian Monographs, Harvard UP 1991, p.54
- 2 David L. Howell, *Territoriality and Collective Identity in Tokugawa Japan*, Daedalus, Vol. 127, No. 3, Early Modernities, 1998, pp.119-124.
- 3 本稿には、引用文を読者の便宜のために、現代語に直された文を掲載するところもあります。この引用の出典は、三上一夫、『横井小楠、その思想と行動』、歴史文化ライブラリー62、吉川弘文館、1999、p.50から受け入れたが、その原本は、『日本思想体系』55巻、p.567をご参照ください。

- 4 『夷慮応接大意』、出典：松浦玲、『佐久間象山、横井小楠』、日本の名著30、中央公論社、1984、p.369
- 5 同、p.370
- 6 『村田己三郎宛』、同、p.385
- 7 『国是三論』、同、p.319
- 8 『村田己三郎宛』、同、p.387
- 9 騎兵隊の編成などは、詳細に記述する必要はないだろうが、例えば、奈良本辰也、『高杉晋作』、中公新書60、pp.141-142を参照。

主な参考文献

- 奈良本辰也、『高杉晋作』、中公新書60、1965
- 松浦玲、『佐久間象山、横井小楠』、日本の名著30、中央公論社、1984
- 三上一夫、『横井小楠、その思想と行動』、歴史文化ライブラリー62、吉川弘文館、1999
- 『日本思想体系』55巻、岩波書店、1971
- 日本思想史37、『横井小楠の思想』、特集、源了圓、立花三郎、M.W.スティーブル、1991
- B. T. Wakabayashi, *Anti-Foreignism and Western Learning in Early Modern Japan. The New Thesis of 1825*. Harvard East Asian Monographs, Harvard UP 1991
- David L. Howell, *Territoriality and Collective Identity in Tokugawa Japan*, *Daedalus*, Vol. 127, No. 3, Early Modernities (Summer) 1998